

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5647号

1月号

令和2年12月24日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり低くなる見込みです。

## 【予報のポイント】

期間の前半を中心に強い寒気の影響を受けるため、向こう1か月の気温は低いでしょう。期間の前半は気温がかなり低くなる見込みです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、低い確率60%です。3～4週目は、低い確率50%です。

### <1週目の予報> 12月26日(土)～ 1月1日(金)

気圧の谷や寒気の影響で雲が広がりやすく、27日と期間の後半は雨または雪の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

### <2週目の予報> 1月2日(土)～ 1月8日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

### <3週目から4週目の予報> 1月9日(土)～ 1月22日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆早期水稲

---

#### 1 種子の選別と消毒

種子は枝梗をよく取り除いた後、塩水選を行い、水で塩水を洗い流します。

種子消毒は、籾袋に余裕を持たせて種子を入れ、薬剤が袋の中心部まで十分に届くようにします。籾に気泡が付いていると効果が低下するため、袋を揺すり気泡をよく抜きます。薬液の水温が、10℃以下では効果が低下する場合があるため、各薬剤の使用基準や注意事項等を確認し、遵守します。温湯消毒法の場合は、割れ籾の多い種子や一部の品種では発芽率が低下する場合もあるので、事前に確認します。

#### 2 浸種と催芽

浸種の水量は種子籾の2倍以上とし、日数は水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度とします。水の交換は、種子消毒の薬剤の効果を安定させるため、3日目以降から行います。種子籾袋の数が多い場合は適宜、位置を入れ替え、温度や酸素が均等になるようにします。浸種が十分な状態になると、籾の胚の部分の部分が白く見えるようになります。浸種後は、30℃～32℃で24時間、芽が1mm程度出た状態まで催芽を行います。水切りを行う際は、厳寒期であるため、夜間の冷え込みで発芽障害を起こさないように注意します。

### ◆ムギ類

---

#### 1 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒と耐干性を高め、分げつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施します。霜や露がある場合や茎の水分が高い時に行うと、茎葉の損傷が大きいため、土壌や株の水分が低い乾燥した時に行います。

分げつ肥は1月中旬に窒素成分で10a当たり2.5kg程度施用し、条播きの場合は土入れを行います。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆共通事項

---

晴天日の午前中はハウス内の換気を行いながら温度を徐々に上昇させることで光合成を促進させ、午後からも急激に温度を下げないように換気に注意します。夜間、暖房機の設定温度より実際の最低温度が低くなる場合があるので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合は、暖房機の設定温度を普段より高めに設定し、実最低温度を維持します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中の早い時間帯に行い、少量多回数のかん水を行います。

### ◆きゅうり

---

①摘心栽培：草勢が低下すると不良果が発生するため早めに摘果を行います。また、採光・風通しを良くするために、生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所や黄化した葉や病気等の認

められる葉を中心に整理します。追肥はかん水時に窒素成分で月5～6kg/10a施用します。  
②つる下ろし栽培：日照不足、低温等の影響による「心止まり」が発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、1枝あたり15枚程度の葉を残します。

## ◆ピーマン

促成栽培は、着果量が多いと草勢が低下しやすくなるので、かん水をやや多く、夜温を普段より高めに設定し、果実の肥大を早めます。また、追肥遅れに注意し、2月までは窒素成分で月3～4kg/10a施用します。

## ◆トマト

特に光を必要とする作物なので、日中は内張ビニールを開け、光の確保に努めます。果実肥大、着色促進、食味向上のためには、玉出しを徹底しながら、過度の摘葉は避けます。

## ◆いちご

食味の低下や小玉化を防止するため、午前中は25～28℃を目安に温度管理を行い、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう裾玉を摘果します。追肥は液肥主体とし、窒素成分で月2～3kg/10aを施用しますが、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

(吉山 健二)

## 葉茎根菜類・いも類

ハウスやトンネル被覆栽培で播種や定植をする時期です。マルチ展張やビニール被覆等、植付け準備を計画的に進めることで地温を確保でき、スムーズな発芽や初期生育が得られます。

## ◆食用かんしょ

トンネル栽培用の育苗時期です。本播植付けの60日前を目安に種芋を伏せ込みます。夜間は保温資材で被覆し、最低地温が20℃以下にならないようにします。萌芽したら日中の温度は25℃程度を保ち、30℃以上に上昇しないように換気に注意し、丈夫な苗に仕上げます。植付け約10日前から暖かい日中にはできる限り換気し、外気に慣らします。

前作で地際部の茎の黒変や芋の腐敗等が発生していたほ場の芋は、種芋として使用しません。種芋選別の際には土壌を水で洗浄し、表皮やなり口が変色、軟化しているものは廃棄します。また薬剤で消毒します。

## ◆ばれいしょ

下旬より不織布被覆栽培の植付け期です。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗のため、植物防疫検査印のある健全な種芋を用います。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には芋の生長点から基部に向けて縦割りし、日陰で風乾してから使用します。縦割りにより芽が順位別に均等に分かれるため本播での生育が揃いやすくなります。

## ◆ごぼう

9～10月にかけて播種したものが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、マルチ栽培は播種後130日、トンネル栽培のものは100日程度です。

## ◆スイートコーン

---

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬から播種適期です。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高め維持することが重要です。播種1週間前までにはトンネル被覆を行い、地温を確保してください。なお、ハウスやトンネルの大きさ、被覆資材の素材や厚みで温度確保の能力が異なります。温度管理が不適切な場合は、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招くので、生育ステージに応じた保温と換気に十分注意します。

(川崎 佳栄)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆ 完熟きんかん

いよいよ1月中旬から、完熟きんかんの収穫が始まります。収穫は、着色や糖度の状況を判断して開始します。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15℃を目安に低く管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により施設内の湿度を低く維持します。

完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、丁寧に扱います。

#### ◆ マンゴー

---

開花期に湿度が高くと、花穂の軸腐病や灰色カビ病が発生し、その後の果実品質が低下します。早朝の換気・除湿や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。微生物資材と加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。普及センターやJAに相談してください。

幼果期以降も早朝の湿度を低く保つことはあざ果の発生抑制にもつながります。今後、厳寒期を迎えますので注意します。

これから出蕾を迎える園では花芽の状況を確認しながら焦らずじっくりと温度を上げ、充実した花を確保します。

### 2 果樹全般

#### ◆ 寒害の事前対策

---

冷気が低滞するのを防ぐため、防風林の枝すかしを行います。すそ枝は地上1mくらいまで剪除します。密閉した防風林では、防風樹の間伐を実施します。

土壌乾燥が激しい場合は寒害を受けやすくなるので、日中の温度が高い時間帯に十分な量のかん水を行います。

(鈴木 美里)

## 花き

### ◆電照ギク

---

1～2月に消灯する作型は、花芽分化時の温度が一年中で最も低い時期になります。

夜温を十分に確保できるように、加温機の設定温度や停電・事故の発生には十分に注意するとともに、栄養成長期間中に低温に遭遇した場合は、消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行います。また、消灯後は変夜温管理を行うなどして暖房コスト削減に努めます。

低温期はハウス内が高湿度になりやすいことから、白さび病の発生リスクが高くなります。各種防除手段を組み合わせることで予防を徹底します。

### ◆スイートピー

---

全天日射量が12月下旬から増加するため、植物体の蒸散も徐々に活発になります。

かん水が遅れると2月以降の草勢低下につながりますので、天候と草勢を見ながらかん水量を徐々に増やすとともに、草勢維持のために適宜追肥を行います。なお、この時期は地温が低いことから、窒素肥料を追肥する場合は硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

### ◆デルフィニウム

---

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長しますので、十分に採光し、カルシウム剤を施用することで、硬さとボリュームを確保します。

### ◆ホオズキ

---

これから土壤消毒を行う場合は、実施前にビニル等であらかじめ被覆しておくことで、地温を少しでも上げるようにします。

また、健全な地下茎を使用し、本ぼへの病気等の持ち込みを防ぎます。

### ◆ラナンキュラス

---

日中は、採光のため内ビニルの開閉をしっかり行います。また、日中のハウス内温度が低すぎると、光合成速度の低下により萌芽や芽の伸長が遅くなることで収量に影響することから、生育適温での管理を行います。

収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行います。

(藤原 明紀)

## 畜産

### ◆家畜防疫対策

---

鳥インフルエンザが県内6市町で8例のほか、西日本の9県で30例が発生しています。また、県内に飛来する野鳥の糞便からもウイルスが確認されており、野鳥が営巣地に帰る4月までは、養鶏場への侵入リスクが高い状況が続きます。また、その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件となることから、農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図ります。

## ◆ 家畜

---

今月は年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に、舎内温度維持のために畜舎を閉め切ることで、舎内が換気不足になりやすい時期でもあります。換気不足は、呼吸器病発生の原因となることから、気温が上がる昼間は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど、換気を十分に行います。また、乾燥すると埃や塵が呼吸器病の原因となりますので、湿度を適度に保つために細霧の噴霧などで、舎内が乾燥しすぎないようにします。哺乳子牛などの幼畜においては、保温箱やコンパネによる風よけの設置とともに、コルツヒーターや赤外線ヒーターなどの効果の高い保温器具を使用します。また、子牛の寝床は、常にきれいで乾燥した状態にし、コンクリートが露出しないようオガクズなどを厚めに敷き、子牛のお腹が冷えるのを防ぎます。

(三角 久志)

## 特用作物

### ◆ 茶

---

#### 1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の発生が懸念されます。被害を受け易い茶園では防風ネットの設置等による対策を行います。また、山間地で積雪による枝折れや裂傷が発生した際は、融雪を待つて事後対策を行います。

#### 2 定植ほ場の植付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植後摘採するまで4～5年かかり、一度植付けると植替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の微気象や茶樹特性を理解した上で、品種やほ場を選定します。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は排水が良く、耕土の深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は、絶対にやめましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は、事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠・暗渠等の排水対策を行います。

また、アルカリ性土壌や改植茶園では土壌pHの調整と堆肥施用による地力増強を図ります。さらに、土壌線虫被害が懸念されるほ場では、早めの土壌消毒を行います。

(松尾 啓史)

### ◆ しいたけ

---

#### 1 植菌と仮伏せ

植菌作業は、玉切りした原木が乾きすぎないうちに、できるだけ早めに行います。

植菌後の原木は、菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木は地際から約50～60センチの高さに横積みして、ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で被覆し、保温と保湿を図ります。

#### 2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能

ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持や、袋かけやビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の一週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意します。

### 3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄（冬菇・香菇・香信）に応じ、遅れるよりも若干早めに採取します。

（古澤 英生）

## ◆たばこ

---

令和3年作は、基本耕作技術を適期に、確実に実行し、気象に左右されにくい『早作タイプの葉たばこ』づくりを目指し、収量・品質の安定確保に向けて取り組みましょう。

早作で根張りのよい充実した作柄をつくるために以下の作業を行います。

- 1 前作物等の関係で準備が遅れないように、計画的な本畑準備作業を行います。
- 2 施肥設計は、土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行います。
- 3 堆肥は、良質完熟堆肥を、すじまき散布します。

大柄晩作化、グレー葉生出防止のためにも、未熟堆肥投入は避けます。

- 4 施肥畦立は、練り畦防止のため、土壌水分が六十%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時二～三個に割れる状態）を目安に、植付一ヶ月前までに完了します。また、併せて水田、畑を問わず、ほ地周囲、枕地に排水溝を完備します。
- 5 苗床肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に則って実施します。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 内容の詳細について

---

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

## 向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	—	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病	やや多 やや多 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します
	黄化えそ病 (MYSV) ミナキイロアザミウマ	並 並	感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病※ 菌核病 黒枯病	やや多 やや多 並 やや少	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。初期の発病葉はほ場外に持ち出し、伝染源にならないよう適切に処分します。また、殺菌剤の付着率向上を目的に、生育に影響の無い下葉はできるだけ除去します。ピーマンうどんこ病の多発時には、薬液が葉裏へ十分量付着するように丁寧に散布するとともに、複数回の連続防除を実施します。
	ミナキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ ※ カバコナジラミ	やや少 多 やや多	ヒラズハナアザミウマの発生が多くみられます。主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 すすかび病	並 並 やや多	うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので過繁茂にならないように管理し、ハウス内の換気を良くします。 また、曇雨天日の昼間に加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。
	黄化葉巻病 (TYLCV) カバコナジラミ類	並 やや多	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	並 並	多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。
	ハダニ類 アブラムシ類	やや少 やや多	ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので低密度時に防除を徹底します。 また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されていますので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。

- 1) ※は注意報を発表しています。3) のホームページに掲載しています。  
 2) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki> です。



(病害虫防除・肥料検査センター)